2025年5月4日　説教「悪霊を追い出された主」

ルカの福音書8章26～39節

弟子たちとともに、ガリラヤ湖の向こう岸に向かう途中、突風が吹き舟は大揺れ。眠っておられたイエスは、おもむろに立ち上がられて、風と波とを静められました。イエスは弟子達の不信仰を語られました。

１．悪霊につかれた人（26～29）

①悪霊につかれた男（26～27）**「こうして彼らは、ガリラヤ湖の向こう側のゲラサ人の地方に着いた。イエスが陸に上がられると、この町の者で悪霊につかれている男がイエスに出会った。彼は、長い間着物も着けず、家には住まないで、墓場に住んでいた。」**

舟は湖の東側のゲラサに着きました。陸に上がられたイエスの目の前に、この町に住む悪霊につかれた男が現れました。なんと彼は着物もつけず、裸のような身なりでした。家に住むことはできなかったのでしょう。彼の根城は墓場でした。

②叫び声をあげて（28）**「彼はイエスを見ると、叫び声をあげ、御前にひれ伏して大声で言った。『いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのです。お願いです。どうか私を苦しめないでください。』」**

イエスを見るなり、この男は叫び声をあげました。彼は、イエスの前にひれ伏して大声で言ったのです。悪霊につかれていたからか、聖霊に包まれたイエスを敏感に嗅ぎ分け、「いと高き子、イエスさま」と呼びかけ、願ったのです。その願いは、私を苦しめないで下さいという切実なものでした。

③鎖や足かせでつながれ（29）**「それは、イエスが汚れた霊に、この人から出て行け、と命じられたからである。汚れた霊が何回となくこの人を捕らえたので、彼は鎖や足かせでつながれて監視されていたが、それでもそれらを断ち切って悪霊によって荒野に追いやられていたのである。」**

イエスは会うなり、この男の中に宿る汚れた霊に出ていけと命ぜられました。汚れた霊が内に入るたびに、彼は狂暴になり、鎖を引きちぎったり、足かせを砕いたりしました（マルコ5:4）。誰も彼を押さえられずに、墓場や荒野で叫び続け、石で自分のからだを傷つけもしました（マルコ5:5）。

２．豚の群れに入った悪霊たち（30～34）

①レギオン（30～31）**「イエスが、『何という名か』とお尋ねになると、『レギオンです』と答えた。悪霊が大ぜい彼に入っていたからである。悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようにと願った。」**

イエスは彼に『何という名か』と男に聞きました。彼の中にある悪霊が、『レギオンです』と答えました。レギオンというのはローマの6000人もいた軍団のことですが、それが転じて「多数」を意味するようになりました。悪霊達は底知れず恐ろしい所に行かせないでくださいと頼んだのでした。

②豚の群れのなかに（32～33）**「ちょうど、山のそのあたりに、おびただしい豚の群れが飼ってあったので、悪霊どもは、その豚に入ることを許してくださいと願った。イエスはそれを許された。悪霊どもは、その人から出て、豚に入った。すると豚の群れはいきなりがけを駆け下って湖に入り、おぼれ死んだ。」**

その辺りの山で、たくさんの豚が飼われていたので、悪霊たちはその豚たちの中に入る許可をイエスに願ったのです。イエスの許可を得ると、悪霊たちは豚の中になかにはいりました。すると、彼らはいきなり駆けだしたのです。全部の豚であったかはわかりませんが、相当数の豚が駆けだしたというのです。それはまた、多数の悪霊が男の内にいたということでもあります。悪霊たちは、湖に飛び込み、溺れて死んでしまいました。豚の死について、かわいそうだという論は意味がありません。

③飼っていた者たち（34）**「飼っていた者たちは、この出来事を見て逃げ出し、町や村々でこの事を告げ知らせた。」**

豚を飼っていた者たちにとってはショックだったでしょう。生計を立てるための豚が相当数、溺れて死んでしまったのですから、彼らは、この出来事を見て、そこから逃げ出し、人々に知らせるしかありませんでした。

３．悪霊の去った男の証し（**35～39 節**）

①正気に返って（35～36）**「人々が、この出来事を見に来て、イエスのそばに来たところ、イエスの足もとに、悪霊の去った男が着物を着て、正気に返って、すわっていた。人々は恐ろしくなった。目撃者たちは、悪霊につかれていた人の救われた次第を、その人々に知らせた。」**

人々は、イエスのそばにくると、悪霊につかれていた人が、正気に戻って、着物もつけ、坐っていたのを見ました。悪霊につかれている以上に、悪霊が去ったことに恐ろしさを覚えるとはどういうことでしょう。一方、目撃者たちは、出来事をつぶさに人々に伝えたということでし。

②ゲラサの民衆（37）**「ゲラサ地方の民衆はみな、すっかりおびえてしまい、イエスに自分たちのところから離れていただきたいと願った。そこで、イエスは舟に乗って帰られた。」**

ゲラサの人々は、豚たちが物凄い勢いで駆け抜け、死んでしまった事に、今後何が起こるのかとおびえてしまいました。人々からの要請を受け入れて、イエスは舟に乗り、西岸に向かって帰られました。

③町中の人々に（38～39）**「そのとき、悪霊を追い出された人が、お供をしたいと願ったが、イエスはこう言って彼を帰された。『家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。』そこで彼は出て行って、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、町中に言い広めた。」**

一方、悪霊を追い出していただいた男は、恵みで満たされ、イエスに同行することを願いましたが、許されず、家に帰って、家族はもちろん、町の人々にも、自分のうちに起きた救いの出来事を言い広めたのでした。

《結論》　今朝もこの聖書箇所から三つのポイントで考えます。

第一は、悪霊の存在を認めることについて。

私たちは神を信じる者たちです。神を信じるということは聖霊なる神を認めるということです。そして、聖霊なる神を信じる者は、聖書が教えているように、悪霊の存在を認める者たちです。悪霊の総元締めはサタン（悪魔）です。今朝の聖書箇所にもあるように、サタンはその働きとして、たくさんの悪霊を使います。マグダラのマリヤは「七つの悪霊を追い出していただいた」（ルカ 8:2）とあります。今朝出て来た男には、「悪霊が大勢、彼に入っていた」（8:30）とあります。汚れた霊が出たり入ったりしたともあります。神を信じるということは、この悪霊の働きを認め、悪霊を意識して歩むということでもあります。そうしてこそ、聖霊なる神のお働きは豊かになるのです。

第二に、悪霊の現実的な働きについてです。

「悪魔の格言」（水谷潔著）という本があることが紹介されています。その中に、「悪魔はこんな風に、私たちクリスチャンの情けない姿を見て、ほくそ笑んでいるのではないか」とある。実際、悪霊の働きは巧みで多岐にわたっている。例えば、祖先崇拝に基づいて、病が癒されるなどと言われると心惹かれる人があるでしょう。輪廻転生に基づく憑依霊がついているとか、オカルト、背後霊、浮遊例だとか・・・どれもサタンの支配する悪霊の働きです。また、サタンは私たちの日常において霊の働きとは全く関係のないようなことを通して、まんまと私たちをサタンの支配に引っ張っていこうともしています。例えば、インターネットを見るうちに、悪霊の思う壺にはめられてしまうことがあります。悪霊の支配する思想を背後に持つ音楽、芸術、スポーツなどから、引きずられることもありましょう。聖霊なる神を見上げていれば、その違いには感づくでしょうが、サタンの罠は巧妙であることを覚えましょう。

第三に、悪霊の働きからの解放について。

いくつもの悪霊につかれていた男は、「汚れた霊よ、この人から出て行け」というお言葉をいただいて、正気に戻りました。私たちの魂が悪霊に支配されている時に、どのようにしたら良いのでしょう。第一に賛美することです。「あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます」（詩篇 22:3）とありますが、賛美をするところに、聖霊が働いてそこに宿ってくださるのです。第二にキリストの名を呼ぶことです。「真理はあなたがたを自由にします。」（ヨハネ 8:32）とある通りです。 第三に御言葉に立ち返ることです。「あなたがたは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」（ローマ 5:17～18）とある通りです。第四に、罪の告白をすることです。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（第一ヨハネ 1:9）とあります。悪霊は私たちが罪を犯すことに導くのですから、その罪を告白することで、聖霊が働きやすくなるのです。十字架の主を見上げて、悔改めていきましょう。今朝の聖餐式も用いられますように。